黒白業をめぐるガワンタシの見解*

矢ノ下　智也

1　序

仏教の業報輪廻の理論によれば、我々有情は善業ないし不善業を積み、その結果として善趣や悪趣へと転生する。この善・不善業と密接な関係にあるものに白業、黒業がある。白業、黒業という概念自体は『増支部』（*Aṅguttaranikāya*, AN）などの初期仏教経典に確認され[1]、『阿毘達磨大毘婆沙論』（以下『婆沙論』）[2]やヴァスバンドゥ（Vasubandhu: ca. 350–430[3]）の『阿毘達磨倶舎論』（*Abhidharmakośabhāṣya*, 以下『倶舎論』）などのアビダルマ文献に頻出し、アサンガ（Asaṅga: ca. 330–405）の『阿毘達磨集論』（*Abhidharmasamuccaya*, 以下『集論』）においても議論がなされる[4]。このように、初期仏教経典から大乗仏教論書にわたり頻出する重要な概念であるにもかかわらず、その詳細はほとんど明らかにされていない[5]。黒業、白業が論じられる際に問題となるのが、「黒と白が混在した業」（黒白業）をどのように理解するかということである。この黒白業の理解の仕方には、『倶舎論』と『集論』で相違点が見られる。しかし、両書における黒白業に対する理解の仕方については、先行研究では解明されていない。

この「黒白業」について、後代のゲルク派学僧セ・ガワンタシ（bSe ngag dbang bkra shis: 1678–1738）が『縁起大論』（*rTen 'brel chen mo*）において、問答を展開している。ガワンタシは、『倶舎論』における黒白業は心相続の観点からの区分であるのに対し、『集論』における黒白業は「意思」（āśaya, bsam pa）と「着手」（prayoga, sbyor ba）という観点からの区分であることを明確にしている。そして、それを踏まえた上でガワンタシは、『集論』の体系に立脚し、黒白業と善業、不善業の対応関係を論じている。

以上を踏まえ、本論文では、『倶舎論』と『集論』における黒白業の定義を整理した上で、『縁起大論』のいくつかの問答を検討し、ガワンタシによる黒白業の理解を明らかにする。

---

*本論文は、JSPS 科研費 21J20283 の助成を受けたものである。

[1]Bayer 2010: 397, fn.316、本庄 2014: 589 によれば、AN や『中阿含経』「達梵行経」に対応する。AN 230.19ff.: Cattā' imāni bhikkhave kammāni mayā sayaṃ abhiññāya sacchikatvā paveditāni. Katamāni cattāri? Atthi bhikkave kammaṃ kaṇhaṃ kaṇhavipākaṃ, atthi bhikkhave kammaṃ sukkaṃ sukhavipākaṃ, atthi bhikkhave kammaṃ kaṇhasukhaṃ kaṇhasukhavipākaṃ, atthi bhikkhave kammaṃ akaṇham asukhaṃ akaṇha-asukkavipākaṃ kammaṃ kammakkhayāya saṃvattati. Imāni kho bhikkave cattāri kammāni mayā sayaṃ abhiññā sacchikatvā paveditānīti.

Woodward 1982: 238: "Monks, these four deeds I have myself comprehended, realized and made known. What four? There is a dark deed with a dark result; a bright deed with a bright result; a deed that is both dark and bright, with a dark and bright result; and the deed that is neither dark nor bright, with a result neither dark nor bright, which being itself a deed conduces to the waning of deeds. These four deeds . . . I have made known."

T 1, 600a26ff.: 云何知業有報。謂或有業黒有黒報。或有業白有白報。或有業黒白黒白報。或有業不黒不白無報。業業盡。是謂知業有報。

[2]T 1545, 589c19ff.: 四業。謂黒黒異熟業。白白異熟業。黒白黒白異熟業。云何非黒非白無異熟業能盡諸業。謂能永斷諸業學思。

[3]ヴァスバンドゥの年代については、Deleanu 2019: 40 を参照。

[4]三友 2007: 458ff.、Bayer 2010: 234ff.、本庄 2014: 589 を参照。

[5]Bayer 2010: 397, fn. 316, 318 で、それぞれの文献における並行箇所を指摘しているものの、深い考察はなされていない。

2 インド仏教文献における黒白業の理解

2.1 『阿毘達磨倶舎論』における黒白業

最初に、『倶舎論』における白業、黒業、黒白業の説明を確認する。以下に引用するのは、『倶舎論本頌』とそれに対するヴァスバンドゥの自註である。

> AK IV.60: aśubhaṃ rūpakāmāptaṃ śubhaṃ caiva yathākramam |
> kr̥ṣṇaśuklobhayaṃ karma tatkṣayāya nirāsravam ||

> [a] 不善業および [b] 色界を結果する善業、[c] 欲界を結果する善業が、順に [a’] 黒業、[b’] 白業、[c’]〔黒と白の〕両業である。[d] 無漏業はそれら〔三つの業〕の滅尽をもたらす[6]。

> AKBh 235.6ff.: aśubhaṃ karma ekāntena kr̥ṣṇaṃ kliṣṭatvāt kr̥ṣṇavipākaṃ cāmanojñavipākatvāt | rūpāptaṃ śubham ekāntena śuklam akuśalenāvyatibhedāt | śuklavipākaṃ ca manojñavipākatvāt | . . . kāmāptaṃ śubhaṃ kr̥ṣṇaśuklam akuśalavyavakīrṇatvāt kr̥ṣṇaśuklavipākaṃ vyavakīrṇavipākatvāt |

> 不善業というのは絶対的に黒である。なぜなら、〔煩悩によって〕汚されているからである。そして、〔その業は〕黒い異熟を有するものである。なぜなら、意に適わない異熟を有するものであるからである。色界を結果する善業は、絶対的に白である。なぜなら、不善業によって分断されないからである[7]。そして、〔その業は〕白い異熟を有するものである。なぜなら、意に適う異熟を有するからである。〔中略〕欲界を結果する善業は、黒白である。なぜなら、不善と混在しているからである。〔その業は〕黒白の異熟を有するものである。なぜなら、〔黒と白が〕混在した異熟を有するものであるからである。

『倶舎論』の体系では、不善業を黒業、色界を結果する善業を白業、欲界を結果する善業を黒白業というように区分する。ここで、注目したいのが欲界を結果する善業、すなわち黒白業である。ヴァスバンドゥの自註によれば、その業は、善業ではあるが、そこに不善が混在しているため、黒白業となる。さらに、黒白業は異熟も黒白であると説明されている。ここで、ある疑問が生じる。それは、ある一つの業が、黒でもありかつ白でもあるならば、相互に対立することになるのではないか、ということである。この点について、ヴァスバンドゥは以下のように述べている。

> AKBh 235.10ff.: saṃtānata etad vyavasthāpitaṃ, na svabhāvataḥ | na hy evaṃjātīyakam ekaṃ karmāsti vipāko vā yat kr̥ṣṇaṃ ca syāt śuklaṃ cānyonyavirodhāt |

> これ（黒白業）は、相続（saṃtāna）の観点から区別されて確立されているのであって、〔業の〕本性（svabhāva）の観点から〔区別されて確立されているの〕ではない。というのも、黒でもありかつ白でもありうるような、そのような種類の単一の業は存在せず、そのような種類の単一の異熟も存在しないからである。なぜなら、一方は他方と対立するからである。

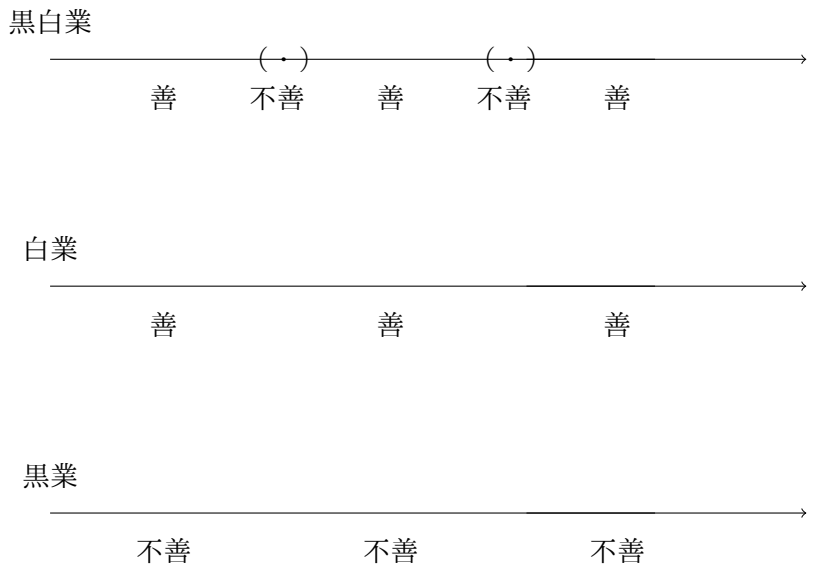
自性（svabhāva）の観点で業が、善、不善というのは、刹那レベルでは成立するが、ヴァスバンドゥは黒白業に関してそのようなことを意図しているのではない。彼は、ある衆生が積む善業の

---

[6]無漏業は、非黒非白なる業である。AKBh 235.14: anāsravaṃ karmaiṣāṃ trayāṇāṃ kṣayāya prahāṇāya saṃvartate | tad dhy akr̥ṣṇam akliṣṭatvād aśuklaṃ vipākaśuklatābhāvāt |（「無漏業はそれら三つの業の滅尽、すなわち断を結果するものである。実に、それ（無漏業）は、〔煩悩によって〕汚されていないから非黒であり、異熟が白であることはないから非白である。」）

[7]avyavakīrṇatvāt「〔不善業が〕混在していないから」という異読もある。「〔不善業が〕混在していない」という読みも可能だが、本論文では善の相続が不善によって分断されないという意味を明確にするために、avyatibhedāt「分断されないから」という読みを採用する。

相続（saṃtāna）に不善が混在することで、善の流れに分断が起こる点に着目して、その業を黒白業として定義しているのである。『倶舎論』において、業の黒、白ということが議論されるのは、あくまでも相続のレベルであり、刹那レベルで議論されるものではない。『倶舎論』における業の黒、白を図式化すると次のようになる。



* → = saṃtāna,（・）= vyavakīrṇa

2.2　『阿毘達磨集論』における黒白業

一方、この黒白業に関して、唯識派のアビダルマ論書である『集論』では、『倶舎論』とは異なった観点から議論がなされている。それは以下の通りである。

> AS 234.19ff.: kṛṣṇaṃ kṛṣṇavipākaṃ karma katamat | yad akuśalaṃ | śuklaṃ śuklavipākaṃ karma katamat | traidhātukaṃ kuśalaṃ | kṛṣṇaśuklaṃ kṛṣṇaśuklavipākaṃ karma katamat | yat kāmapratisaṃyuktaṃ vyāmiśraṃ | āśayataḥ kṛṣṇaṃ prayogataḥ śuklaṃ prayogato vā kṛṣṇam āśayataḥ śuklaṃ |
>
> [a] 黒であり、かつ黒い異熟を有する業とは何か。[a’] 不善〔業〕である。[b] 白であり、かつ白い異熟を有する業とは何か。[b’] 三界の善〔業〕である。[c] 黒白であり、かつ黒白の異熟を有する業とは何か。[c’] 欲界と結びつき、なおかつ〔黒と白が〕混在した〔業〕である。すなわち、意思（āśaya）の観点から見れば黒であり、着手（prayoga）の観点から見れば白である〔業〕のことである。あるいは、意思の観点から見れば白であるが、着手の観点から見れば黒である〔業〕のことである。

『集論』の体系では、白業とは三界の善業であり、これは先ほど検討した『倶舎論』において、色界を結果する善業が白業として定義されているのとは異なる。つまり、『倶舎論』では、白業は色界を結果する善業であるのに対し、『集論』では、白業は三界を結果する全ての善業である。ただ、ここで最も注目すべき点は、『倶舎論』でも議論がなされる黒白業である。『集論』において、黒白業は「欲界と結びつき、なおかつ〔黒と白が〕混在した業」として定義される。具体的には、意思の観点から見れば黒であり、着手の観点から見れば白である業、あるいは意思の観点から見れば白であり、着手の観点から見れば黒である業のことを指している。つまり、ある業を「意思」（āśaya）と「着手」（prayoga）という二つの観点から判断し、それぞれの観点に違いがある場合に、

黒白業として定義されているのである[8]。『集論』における黒白業の理解を図式化すると、次のようになる。

【不善業のケース】

t_1	⟶	t_2	⟶	t_n
意思（āśaya）		着手（prayoga）		異熟（vipāka）
●		○		●○

【善業のケース】

t_1	⟶	t_2	⟶	t_n
意思（āśaya）		着手（prayoga）		異熟（vipāka）
○		●		●○

* ● = 黒（悪性）, ○ = 白（善性）, ●○ = 黒白

以上、黒白業をめぐる『倶舎論』と『集論』それぞれの見解を確認したが、相違点が見られた。まず一つは、黒白業を説明する観点の違いである。すなわち、『倶舎論』は心相続の観点から黒白業を説明するのに対し、『集論』は意思と着手という二項目の観点から説明を行う。さらには、黒白業と善・不善業の関係についての相違点である。『倶舎論』の体系では、黒白業は欲界を結果する善業であるのに対し、『集論』の体系では、必ずしもそうとは言えない。この点について、『集論』そのものから理解するのは難しいが、註釈を踏まえるとそのように理解することが可能である[9]。後者の相違点は、次のように図式化可能である。

	『倶舎論』	『集論』
黒業	不善業	不善業
白業	色界を結果する善業	三界の善業
黒白業	欲界を結果する善業	善業・不善業

[8]ASBh 70.2ff.: tayoś ca kṛṣṇaśuklatāṃ praty anyonyāsādṛśye saty ekaṃ karma kṛṣṇaśuklaṃ vyavasthāpyate |（「それら二つ（意思と着手）が黒白であることに関して、〔それら二つが〕互いに対応しないとき、一つの業が、黒でありかつ白であると規定される。」）

Bayer 2010: 238: And because those two are different from each other as far as their being black or white is concerned, they are determined as one *karman*, that is both black and white.

[9]ASBh 69.24ff.: kṛṣṇaśuklaṃ kṛṣṇaśuklavipākaṃ yat kāmapratisaṃyuktaṃ vyāmiśraṃ kuśalākuśalam ity arthaḥ |（「黒白であり、黒白の異熟を有する〔業〕は、欲界と結びつき、なおかつ〔黒と白が〕混在した〔業〕、すなわち善・不善業という意味である。」）

Bayer 2010: 236: “White and black [*karman*] with white and black ripening is that which is connected with [the realm of] desire [and] mixed. “Wholesome and unwholesome” is the meaning [of this expression “mixed”].”

kuśalākuśala という複合語を「善でありかつ不善であるもの」という同格限定複合語（karmadhāraya）として理解することも文法的には可能である。ただし、後にガワンタシが「善と不善に共通基体はない」と述べるように、ある一つの業に善と不善が共存することは教義的に成立し得ない。したがって、ガワンタシの考えに従い、「善・不善」という集合並列複合語（samāhāradvandva）として理解した。

これらの点について、ガワンタシは『縁起大論』において議論を行なっている。特に、第二点の黒白業と善業、不善業の対応関係については具体的な業について言及し、明らかにしている。次節ではガワンタシによる問答を分析し、彼による黒白業の理解を明らかにしたい。

3 ガワンタシによる黒白業の理解

3.1 黒白業をめぐる『倶舎論』と『集論』の説明方法の相違

ガワンタシは『倶舎論』で論じられる黒白業と『集論』で論じられる黒白業の違いを述べている。『倶舎論』での黒白業の議論について以下で見ていく。彼の見解は以下の通りである。

འདོད་པའི་བདེ་འགྲོར་སྐྱེ་བ་འཕེན་བྱེད་ཀྱི་ལས་དེ་གང་ཟག་གི་རྒྱུད་ལ་ཕལ་ཆེར་མི་དགེ་བ་དང་འདྲེས་ནས་ལྡན་པས་ལས་དཀར་ནག་འདྲེས་པ་དང་དེའི་རྣམ་སྨིན་མྱོང་དུས་ཀྱང་ཕལ་ཆེར་རྣམ་སྨིན་ཡིད་མི་འོང་པ་དང་འདྲེས་ནས་མྱོང་བས་རྣམ་སྨིན་དཀར་ནག་འདྲེས་པ་ཡིན་པས་དཀར་ནག་འདྲེས་པའི་ལས་ཞེས་བཤད་པའི་ཕྱིར། དེར་ཐལ། གང་ཟག་གཅིག་གི་རྒྱུད་ལ་སྦྱར་ནས་ལས་དང་རྣམ་སྨིན་དཀར་ནག་འདྲེས་ཚུལ་བཤད་དགོས་ཀྱི། ལས་དཀར་ནག་གཉིས་ཀ་ཡིན་པ་དང་། རྣམ་སྨིན་དཀར་ནག་གཉིས་ཀ་ཡིན་པ་མི་སྲིད་པའི་ཕྱིར། མངོན་འགྲེལ་ལས།

འདི་ནི་རྒྱུད་ཀྱི་སྐོ་ནས་རྣམ་པར་བཞག་གི་ངོ་བོ་ཉིད་ཀྱི་སྐོ་ནས་ནི་མ་ཡིན་ཏེ། ལས་ས་མ་རྣམ་པར་སྨིན་པ་གཅིག་ལ་དཀར་པོ་ཡང་ཡིན་ནག་པོ་ཡང་ཡིན་པ་དེ་ལྟ་བུ་ནི་མེད་དེ། ཕན་ཚུན་འགལ་བའི་ཕྱིར་རོ། །

ཞེས་གསུངས་པའི་ཕྱིར། (*rTen ’brel chen mo* 136b2ff.)

[a] 欲〔界〕の善趣への生を引き寄せる業はほとんどの場合（phal cher）、人の〔心〕相続において不善と混在する形で保持されるので〔「白と黒が混在した業」であると説明され〕、また白と黒が混在した業とそれ（業）の異熟を経験する時にもほとんどの場合、好ましくない異熟と混在した形で経験されるため、白と黒の異熟が混在するので「白と黒が混在した業」と説明されるゆえに。[d] そうである（「白と黒の混在した業」と説明される）ことになる。[e] ある人の〔心〕相続に結びつけて、業と異熟の白と黒が混在するあり方を説明するべきであるが、業が白でもあり黒でもあることや異熟が白でもあり黒でもあるということはあり得ないゆえに。『倶舎論』で、

> 「これ（黒白業）は、相続の観点から区別されて確立されているのであって、〔業の〕本性の観点から〔区別されて確立されているの〕ではない。というのも、黒でもありかつ白でもあるような、そのような種類の単一の業は存在せず、そのような種類の単一の異熟も存在しないからである。なぜなら、一方は他方と対立するからである。」[10]

と述べられているゆえに。

既に確認したように、『倶舎論』の体系において黒白業というのは、相続の観点から見た場合の区分であり、刹那レベルで業が白かつ黒ということを述べているのではない。ガワンタシによれば、欲界の善趣への生を引き寄せる業はほとんどの場合、心相続において不善と混在するあり方で保持されているため、白と黒が混在した業であると言われ、さらに、その業の異熟もほとんどの場合、好ましくない異熟と混在したあり方で経験されるので、白と黒が混在した業であると言われるのである。『倶舎論』の体系では、相続のレベルで白と黒が混在した業について説明してい

[10] AKBh 235.10ff. を参照。

るのであり、刹那レベルで、業が白でもありかつ黒でもあることや、その異熟が白でもあり黒でもあるというような議論をしているのではないというということをガワンタシは強調している。

続いて、ガワンタシは『集論』における黒白業について問答を展開する。まずは、質問者が提示する誤った見解を確認する。

ཁོ་ན་རེ། དེ་ཚོས་ཅན། ཀུན་བཏུས་ལས། རང་གིས་དཀར་ནག་འདྲེས་པའི་ལས་བཤད་པ་ལྟར་གྱི་དཀར་ནག་འདྲེས་པའི་ལས་ཡིན་པར་ཐལ། དཀར་ནག་འདྲེས་པའི་ལས་ཡིན་པའི་ཕྱིར་ན་ (*rTen 'brel chen mo* 138b5ff.)

彼が〔次のように〕述べる。「それ（意思（bsam pa, āśaya）と着手（sbyor ba, prayoga）の観点から白である欲〔界〕の善趣への生を引き寄せる業）を主題とすると、[a]『〔阿毘達磨〕集論』で「それ自体で白と黒が混在する業である」と説明されているところの白と黒が混在する業であることになる。[b] 白と黒が混在する業であるゆえに。」

その見解によれば、ある業が白と黒が混在していれば、その業は必ず『集論』で「それ自体で白と黒が混在する業」と説明されるような業である。つまり、質問者は『集論』において、黒白業というのは、業そのものが白でありなおかつ黒であるものを指していると考えている。しかし、この見解には二つの誤りがある。すなわち、そもそも『集論』では「それ自体で白と黒が混在する業」ということは論じられていないこと、さらには、質問者は『倶舎論』で言及される黒白業と『集論』で言及される黒白業を混同しているという二点である。この質問者の見解に対して、回答者は次のように述べる。

མ་ཁྱབ། འདོད་མི་ནུས་ཏེ། ཀུན་བཏུས་ཀྱིས་དཀར་ནག་འདྲེས་ཚུལ་ཆུང་གཅིག་ལ་ལྟན་ཚུལ་ལ་མ་བཤད་པའི་ཕྱིར། དེར་ཐལ། ཀུན་བཏུས་སུ་ལས་རང་གི་བསམ་སྦྱོར་གཉིས་ཀྱི་སྒོ་ནས་བཤད་པའི་ཕྱིར། ཀུན་བཏུས་ལས།

དཀར་ནག་ཏུ་ཐུར་ལ་རྣམ་པར་སྨིན་པ་དཀར་ནག་ཏུ་འཐུར་བ་གང་ཞེ་ན། འདོད་པ་དང་རབ་ཏུ་ལྡན་པའི་འདྲེས་མ་སྟེ། བསམ་པས་གནག་ལ་སྦྱོར་བས་དཀར་བ་འམ། སྦྱོར་བས་གནག་ལ་བསམ་པས་དཀར་བའོ། ། (*rTen 'brel chen mo* 138b6ff.)

この時、〔論拠 [b] と帰結 [a] の間の〕論理的必然性は成立しない。〔白と黒が混ざり合う業であることに〕同意することはできない。[c]『〔阿毘達磨〕集論』は、白と黒の混ざり合うあり方が単一の〔心〕相続においてどのように保持されるか、について説明していないゆえに。[d] そうである（[c]『〔阿毘達磨〕集論』は、白と黒の混ざり合うあり方が単一の〔心〕相続においてどのように保持されるか、について説明していない）ことになる。[e]『〔阿毘達磨〕集論』では，業それ自体に関わる意思（āśaya）と着手（prayoga）という二つの観点から説明されているゆえに。『〔阿毘達磨〕集論』で、

「【問：】白黒であり、なおかつ〔その〕異熟が白黒である業とは何であるのか。【答：】欲〔界〕と結びつき、なおかつ混ざり合った〔業〕である。すなわち、意思の観点から見れば黒であり、着手の観点から見れば白である〔業〕。あるいは、意思の観点から見れば黒であるが、着手の観点から見れば白である〔業〕のことである。」[11]

と述べられているゆえに。

回答者によれば、『集論』において「黒白業」というのは、業が意思（āśaya）と着手（prayoga）という二つの観点から説明されているのであって、『倶舎論』で説明されるような単一の心相続に

[11] AS 235.19ff. を参照。

おいてどのように保持されるか、について説明したものではない。先に述べたように、『集論』の体系によれば、意思の観点から見れば黒、着手の観点から見れば白の場合と意思の観点から見れば白、着手の観点から見れば黒の場合の二通りある。つまり、意思と着手の両者に相違がある場合に、一つの業が黒白業として定義されているのである。回答者はこの『集論』の体系に立脚し、質問者の見解を退けている。

3.2 黒白業と善業、不善業の関係

既に確認したように、『倶舎論』の体系では、黒白業を欲界を結果する善業として理解するのに対し、『集論』の体系では、必ずしも善業であるとは限らない。なぜなら、不善業として理解される黒白業もあるからである。ガワンタシは、この点について詳しく問答を展開している。

3.2.1 不善業の場合

ཁོ་ན་རེ། དགེ་མི་དགེའི་ལས་གཉིས་ཀྱི་གཞི་མཐུན་ཡོད་པར་ཐལ། བསམ་པས་གནག་ལ་སྡུག་བས་དཀར་བའི་ལས་དེ་ཡིན་པའི་ཕྱིར། དེར་ཐལ། དེ་མི་དགེ་བའི་ལས་ཡིན་པ་གང་ཞིག་དགེ་བའི་ལས་ཡིན་པའི་ཕྱིར། (*rTen ’brel chen mo* 139a3ff.)

彼が〔次のように〕述べる。「[a] 善業と不善業には共通基体（gzhi mthun）[12]があることになる。[b] 意思の観点から見れば黒だが、着手の観点から見れば白である〔業〕が当該のものであるゆえに。[c] そうである（意思の観点から見れば黒だが、着手の観点から見れば白である〔業〕が当該のものである）ことになる。それは、[d-1] 不善業であり、なおかつ [d-2] 善業でもあるゆえに。」

質問者は、ある業が意思の点で黒であり着手の点で白である場合、その業は不善業でもあり、なおかつ善業でもあるので、善業と不善業には共通基体があることになると述べている。しかし、この見解も誤ったものである。回答者は次のように返答する。

དང་པོ་གྱུར་སྟེ། ཁྱོད་བསམ་པས་ནན་ལ་བའི་ལས་ཡིན་པའི་ཕྱིར། ཁྱུ་སྟེ། རྒྱའི་ཀུན་སློང་གི་ཐོ་ནས་ནན་ལ་བའི་ལས་ཡིན་ན་མི་དགེ་བའི་ལས་ཡིན་པས་ཁྱུ་བའི་ཕྱིར། དེར་ཐལ། མི་དགེ་བའི་རྩ་བ་གསུམ་པོ་གང་རུང་གིས་རྒྱའི་ཀུན་སློང་བྱས་པའི་ལས་ཡིན་ན་མི་དགེ་བའི་ལས་ཡིན་པས་ཁྱུ་བའི་ཕྱིར། མཇུག་ལས།

སྡུག་བ་རྩ་བ་གསུམ་ལས་སྐྱེས། །

ཞེས་གསུངས་པའི་ཕྱིར་ཏེ། འདིའི་དོན་ནི་མི་དགེ་བའི་ལས་རྣམས་ལ་དུས་ཀྱི་ཀུན་སློང་མི་དགེ་བའི་ཚ་བ་ཆགས་སོགས་གསུམ་པོ་གང་རུང་གིས་བྱས་པ་དགོས་པའི་ངེས་པ་མེད་ཀྱི་དང་པོའི་རྒྱའི་ཀུན་སློང་མི་དགེ་བའི་ཚ་བ་གསུམ་པོ་གང་རུང་གིས་བསྐྱེད་པས་ན་མི་དགེ་བའི་ལས་སུ་བཞག་ཅེས་པའི་དོན་ཡིན་པའི་ཕྱིར་ཏེ། མཇུག་འགྲེལ་ལས།

འདི་ལ་ལས་ཀྱི་ལམ་ཐམས་ཅད་ཆགས་པ་ལ་སོགས་པས་མཐར་ཕྱིན་པར་བྱེད་པ་མ་ཡིན་གྱི་སྡུག་བ་ཚ་བ་གསུམ་ལས་སྐྱེས། དེ་དག་གི་སྡུག་བ་ནི་མི་དགེ་བའི་ཚ་བ་གསུམ་ལས་སྐྱེས་པ་ཡིན་པས་ན་དང་པོའི་ཀུན་ནས་སློང་བའི་ཚོགས་ལས་དེ་སྐད་བཤད་དོ། །

[12]p. 170, fn.9 を参照。

ཞེས་གསུངས་པའི་ཕྱིར། དེ་སྐད་བཤད་ཅེས་པ་མི་དགེ་བ་ཞེས་བཤད་པའི་དོན་ཡིན་པའི་ཕྱིར། (*rTen 'brel chen mo* 139a4ff.)

第一〔の論拠〕は成立する。[e] それは、意思（bsam pa, *āśaya）の観点から見れば黒業であるゆえに。論理的必然性は成立する。[f] 原因、すなわち動機の観点から〔あるものが〕黒業であれば、〔それは〕必ず不善業であるゆえに。[g] そうである（不善業である）ことになる。[h] 不善業の三根（rtsa ba gsum po）のいずれかによって、原因、すなわち動機が形成された業であれば、必ず不善業であるゆえに。『倶舎論本頌』で、

> 「着手（sbyor ba, prayoga）は三根から生じる。」[13]

と述べられているゆえに。[i] この意味は諸々の不善業に関して、同時的な動機が不善業の貪欲などの三根のいずれかによって必ず形成されるという確定はないが、第一の原因という等起（rgyu'i kun slong）は不善業の三根のいずれかにより生み出されたものであるので、不善業として設定しているという意味であるゆえに[14]。『倶舎論』で、

> 「これに関して、全ての業道が貪欲などによって完遂されるのではない。**しかし、着手は三根から生じる。（68d）**それらの加行は、不善の三根から生じたものであるので、第一の等起（dang po'i kun nas slong ba, ādisamutthāna）の説に基づいて以上のよう説かれたのである。」[15]

と述べられているゆえに。[j]「以上のように説かれた」という文言は、不善業であると説かれたという意味であるゆえに。

回答者は、質問者が提示した「不善業である」という論拠については同意している。というのも、意思の点では黒であり、着手の点では白であるという黒白業は、不善業であるからである。ここで「意思」（bsam pa, āśaya）とは原因、すなわち動機を指す。彼によれば、ある業の動機が黒であれば、その業は必ず不善業になる。なぜなら、不善業というのは必ず貪・瞋・痴の三根という動機のいずれかから必ず生じるからである。彼は『倶舎論本頌』に立脚してこの理解を提示する。したがって、目下議論になっている黒白業は不善業として理解されるのである。ガワンタシはさらに問答を続ける。

གཉིས་པ་མ་གྱུར་ན། བསམ་པས་གནོད་ལ་སྦྱོར་བས་དཀར་བའི་ལས་དེ་ཚོས་ཅན། དགེ་བའི་ལས་ཡིན་པར་ཐལ། སྦྱོར་བས་དཀར་བའི་ལས་ཡིན་པའི་ཕྱིར་ན་ (*rTen 'brel chen mo* 139b4ff.)

第二〔の論拠 [d-2] 善業である〕が成立しないとするならば、意思（bsam pa, āśaya）の観点から見れば黒だが、着手（sbyor ba, prayoga）の観点から見れば白である業を主題とすると、[k] 善業であることになる。[l] 着手の観点から見れば白業であるゆえに。

---

[13] AK IV.68d: prayogas tu trimūlajaḥ ||

[14] ガワンタシの述べる第一の原因という等起とは、『倶舎論』で規定される「原因という等起」（hetusamutthāna）と「同時的な等起」（tatkṣaṇasamutthāna）の二つのうち、前者を指すと考えられる。ヴァスバンドゥは次のように述べている。AKBh 203.13ff.: **samutthānaṃ dvidhā hetutatkṣaṇotthānasaṃjñitam (10ab)** | dvividhaṃ samutthānaṃ hetusamutthānaṃ tatkṣaṇasamutthānaṃ ca | tatraiva kṣaṇe tadbhāvāt | **pravartakaṃ tayor ādyaṃ dvitīyam anuvartakam (10cd)** hetusamutthānaṃ pravartakam ākṣepakatvāt | tatkṣaṇasamutthānam anuvartakaṃ kriyākālānuvartanāt |（「**等起には二種類ある。（1）原因という等起と（2）同時的な等起である。**まさにその刹那において、それ（等起）があるからである。**両者のうちで、第一のものは、発動させるもの（pravartaka）であり、第二のものは、〔第一のものに〕従うもの（anuvartaka）**である。原因という等起は、発動させるものである。なぜなら、はたらきかけるものであるから。同時的な等起は、〔第一のものに〕従うものである。なぜなら、実現するときに従うから。」）

[15] AKBh 240.16ff.: nātra sarveṣāṃ karmapathānāṃ lobhādibhir niṣṭhā | **prayogas tu trimūlajaḥ || (68d)** prayogas teṣām akuśalamūlatrayāj jāta ity ādisamutthānavacanād evam uktaḥ |

質問者の見解によれば、ある業を着手の観点から見たときに白であれば、その業は必ず善業になる。それゆえ、質問者は第二の論拠もあわせて成立すると考え、善業と不善業の共通基体が成立すると冒頭で述べているのである。しかし、この見解が認められることはない。回答者は、次のように述べている。

གཏན་ནས་མ་ཁྱབ་སྟེ། སྒྲོར་བས་དཀར་ཡང་རྒྱའི་ཀུན་སློང་ངན་པས་མི་དགེ་བའི་ལས་ཡིན་པའི་ཕྱིར། དེར་ཐལ། སྦྱི་བོ་གཞན་བསླུ་བར་འདོད་པའི་བསམ་པས་ཀུན་ནས་བསླང་བ། སྦྱིན་པ་གཏོང་བའི་ལས་དང་། བསམ་པ་དེས་རབ་བྱུང་བྱེད་པའི་ལས་སོགས་བསམ་པས་གནས་ལ་སྒྲོར་བས་དཀར་བའི་ལས་སུ་བཤད་པ་གང་ཞིག་དེ་ལྟ་བུའི་ལས་ཐམས་ཅད་མི་དགེ་བའི་ལས་ཡིན་པའི་ཕྱིར། ཀུན་བཏུས་འགྲེལ་བ་ལས།

དེ་ལས་བསམ་པ་གནས་ལ་སྒྲོར་བ་དཀར་བ་སྟེ། དཔེར་ན་མི་འགའ་ཞིག་གཞན་དག་བསླུ་བར་འདོད་ནས་དེ་དག་ཡིད་ཆེས་པར་བྱ་བའི་མཚན་མར་བསམ་པས་སྦྱིན་པ་ནས་རབ་ཏུ་བྱུང་པའི་བར་དུའོ། །

ཞེས་གསུངས་པའི་ཕྱིར། (*rTen ’brel chen mo* 139b5ff.)

この時、絶対的に（gtan nas）〔論拠 [l] と帰結 [k] の間の〕論理的必然性は成立しない。[l] 着手の観点から見れば白業であっても、原因である悪性の動機による不善業であるゆえに。[m] そうである（着手の観点から見れば白業であっても、原因である悪性の動機による不善業である）ことになる。[n-1] 他人を欺こうとする意思（bslu bar ’dod pa’i bsam pa）によって動機づけられて〔積む〕布施業（sbyin pa gtong pa’i las）やその意思（bsam pa, āśaya）によって出家する（rab byung byed pa’i las）という業などは、意思の観点からは黒業であるが、着手の観点からは白業であると説明されており、なおかつ [n-2] そのような一切の業は不善業であるゆえに。『〔阿毘達磨〕集論』註釈で、

「それらのうちで、意思（āśaya, bsam pa）の観点からは黒だが、着手（prayoga, sbyor ba）の観点からは白である〔業がある。それは次の通りである〕。例えば、ある人が他人を欺こうとした上で、彼らを信頼させるために布施をするというようなものである。」[16]

と述べられているゆえに。

回答者が提示する見解によれば、意思の観点から見たときに黒であり、着手の段階から見たときに白である業は必ず不善業であって、その業が善業であるということは絶対的にあり得ないのである。回答者は、『集論』の註釈に立脚して、当該問答で議論されている業が具体的にはどのようなものなのか説明を与えている。回答者の理解に従えば、他人を欺こうとする意思を動機として布施を行うことや出家することが、それに該当する。布施を行うことは六波羅蜜の一つであるため善業のように見えるが、ここでは布施を行うときの動機が他人を欺こうとする意思という悪性のものであるため、不善業になるのである。この問答が示唆しているのは、ある業が善業であるかあるいは不善業であるかを決定づけるのは、「意思」であるため、いくら「着手」が善性であっても「意思」悪性であれば、その業は不善業としてみなされるということであると考えられる。

---

[16] ASBh 70.3ff.: **tatrāśayataḥ kṛṣṇaṃ prayogataḥ śuklaṃ** yathāpi kaścit parān vañcayitukāmas teṣāṃ saṃpratyayananimittaṃ bhāvena dānāni dadāti yāvat pravrajaty api |

Bayer 2010: 238: “Here, black from [the point of view of its] disposition and white from [the point of view of its] preparation [means]: Like [when] someone wishing to mislead others really gives donation in order to make them trust him.”

チベット語訳では、サンスクリット原文にある bhāvena「実際に」が訳出されていない。

3.2.2 善業の場合

直前の問答では、黒白業が不善業となるケースを検討したが、ここでは黒白業が善業として理解されるケースについて検討する。ガワンタシは以下のように問答を展開する。

ཡང་ཁ་ཅིག །ཀུན་བཏུས་སུ་བཤད་པའི་དཀར་ནག་འདྲེས་པའི་ལས་ཡིན་ན་དགེ་བའི་ལས་ཡིན་པས་ཁྱབ་པར་ཐལ། མངོན་བྱེ་བཤད་པ་ལྟར་ཕྱི་དཀར་ནག་འདྲེས་པའི་ལས་ལ་དེའི་ཕྱིར་ན། (*rTen 'brel chen mo* 140a6ff.)

さらにある者が〔次のように述べる〕。「[a]『〔阿毘達磨〕集論』に説かれるところの白と黒の混じり合った業であれば、それは必ず善業であることになる。[b]『倶舎論』に説かれるような白黒の混じり合った業であれば〔それは必ず善業であることになる〕ゆえに。」

ここで議論になっているのは、あるものが『倶舎論』で言及されるような白と黒が混在した業（黒白業）であれば、それは必ず『集論』で言及されるような黒白業であるという論理的必然性が成立するか否かということである。おそらく、質問者は『倶舎論』で言及される黒白業と『集論』で言及される黒白業を混同していると考えられる。これに対して、回答者は次のように述べている。

མ་ཁྱབ། བློ་མས་ཁང་གི་སློབ་མ་ཉེས་སྤྱོད་ལས་བཟློག་ནས་ཚངས་སྤྱོད་རྣམ་དག་ལ་འགོད་འདོད་ཀྱི་བསམ་པས་ཀུན་ནས་བསྒྱང་ཏེ་ལུས་ཀྱིས་བརྡེགས་པ་དང་ངག་གིས་ཚོག་རྩུབ་མོ་སྨྲས་པའི་ལས་ཚོས་ཅན། མི་དགེ་བའི་ལས་ཡིན་པར་ཐལ། ཀུན་བཏུས་སུ་བཤད་པའི་དཀར་ནག་འདྲེས་པ་ལས་ཡིན་པའི་ཕྱིར། ཁྱབ་པ་ཁས། རྒྱས་གྲྭ་སྟེ། དེ་བཞིན་དུ་ཕས་ཀྱང་བུ་དོན་མ་ཡིན་པ་ལས་བཟློག་ནས་ཚོས་ལྡན་ཀྱི་དོན་ལ་གཞུག་པར་བྱའོ་སྙམ་པ་སྟེང་བརྩེ་བས་ཀུན་ནས་བསྒྱང་ཏེ་ཚོག་རྩུབ་མོ་སྨྲས་པའི་ལས་སོགས་ཀུན་བཏུས་སུ་དཀར་ནག་འདྲེས་པའི་ལས་སུ་བཤད་པའི་ཕྱིར། དེར་ཐལ། ལས་དེ་དག་བསམ་པས་དཀར་ལ་སྤྱོར་བས་གནས་པའི་ལས་སུ་བཤད་པའི་ཕྱིར། ཀུན་བཏུས་འགྱེལ་བ་ལས།

སྤྱོར་བ་གནས་ལ་བསམ་པ་དཀར་བ་ནི་དགེ་ན་འགལ་ཞིག་བྱའམ་སློབ་མ་ལ་མི་ཕན་པ་བཟློག་པར་འདོད་ཀྱང་ཕན་པ་ལ་ནི་སྤྱོར་བར་འདོད་ཅིང་སྟེང་བརྩེ་བའི་སེམས་ཀྱིས་ལུས་དང་ངག་གིས་དྲག་ཏུ་ཟྭད་པ་དེའི་ཚེ་ཀུན་ནས་ཉོན་མོངས་པར་འགྱུར་རོ། །

ཞེས་གསུངས་པའི་ཕྱིར་ཏེ། ལྷང་འདི་དག་གིས་བསམ་པ་ཞེས་པ་རྒྱའི་ཀུན་སློང་དང་སྤྱོར་བ་ཞེས་པ་དངོས་གཞི་ལ་ཟྭད་པའི་ཕྱིར། གོང་དུ་འདོད་ན། དེ་འད�eའི་ལས་དེ་དག་ཚོས་ཅན། མི་དགེ་བའི་ལས་མ་ཡིན་པར་ཐལ། དགེ་བའི་ལས་ཡིན་པའི་ཕྱིར། དེར་ཐལ། ལས་དེའི་སྤྱོར་བ་སྟེ་དངོས་གཞི་ནས་ཀྱང་རྒྱའི་ཀུན་སློང་དགེ་རྩོས་ཀུན་ནས་བསྒྱང་པའི་དགེ་བའི་ལས་སུ་འཇོག་དགོས་པའི་ཕྱིར། རིན་ཆེན་འཕྲེང་བ་ལས།

འདོད་ཆགས་ཞེ་སྡང་གཏི་མུག་མེད། ། དེས་བསྒྲེད་ལས་ནི་དགེ་བའོ། །

ཞེས་གསུངས་པའི་ཕྱིར། (*rTen 'brel chen mo* 140b1ff.)

この時、〔論拠 [b] と帰結 [a] の間の〕論理的必然性は成立しない。師匠が自身の弟子を悪行（nyes spyod）から退けさせた上で、極めて純粋な梵行（tshangs spyod）に導きたいという思によって動機づけられて身体的に叩く（lus kyis brdegs）という業や言語的に粗悪な言葉を語るという業を主題とすると、[c]〔それは〕不善業であることになる。[d]『〔阿毘達磨〕集論』に説かれているところの白と黒の混ざり合った業であるゆえに。論理的必然性は承認済みである。論拠 [d] は成立する。また同様にして、父が息子を不利益から退けさせた上で、法に則った形で（chos ldan）利益へと導きたいという考え、すなわち悲によって動機づけられて粗悪な

言葉を語るという業などが『〔阿毘達磨〕集論』で白と黒の混じり合った業として説明されているゆえに。[e] そうである（父が息子を不利益から退けさせた上で、法に則った形で利益へと導きたいという思である悲によって動機づけられて粗悪な言葉を語るという業などが『〔阿毘達磨〕集論』で白と黒の混じり合った業である）ことになる。[f] それら業は、意思の観点では白業であるが、着手の観点では黒業として説明されているゆえに。『〔阿毘達磨〕集論』註釈で、

> 「着手（prayoga, sbyor ba）は黒であるが、意思（āśaya, bsam pa）は白である〔業〕がある。例えば、ある人が息子あるいは弟子を不利益（mi phan pa）から回避させようとしたり、利益（phan pa）に〔息子や弟子を〕結びつけたいと欲して、悲の心を持ちながら身体と言葉を用いて暴力的なことを為すとき、彼はその場限りでは[17]汚されている。」[18]

と述べられているゆえに。[g] これらのアーガマによって、bsam pa という語は原因である動機を指し、sbyor ba という語は実際の〔業〕を指すゆえに。先ほどの帰結（[c] 不善業であることになる）に同意するならば、そのようなそれらの業を主題とすると、[h] 不善業ではないことになる。[i] 善業であるゆえに。[j] そうである（善業である）ことになる。[k] その業の着手すなわち実際の〔業〕が黒であっても、〔その業は〕原因すなわち動機となる善根によって動機づけられた善業として措定されるはずであるゆえに。『宝行王正論』（*Ratnāvalī*）で、

> 「無貪、無瞋、無痴とそれによって生じた業は善である。」[19]

と述べられているゆえに。

質問者は、『集論』註釈に依拠して善業になる黒白業の例を提示する。例えば、師匠が自身の弟子を極めて純粋な梵行へと導きたいという動機によって弟子を殴打したり、粗悪な言葉を弟子に用いる場合、この業は善業として理解される。確かに、弟子を殴打したり、弟子に対して粗悪な言葉を語るという箇所のみに注目すれば、不善業となるかもしれない。しかし、『集論』の体系では、黒白業というのは、意思と着手を別々ではなく一組として捉えた上で理解されるべきものである。したがって、目下議論となっている師匠が弟子を殴打する業というのは、師匠が弟子を極めて純粋な梵行へと導きたいという善性の動機（白）を伴って、弟子を殴打（黒）していることから、全体としてこの業は善業となるのである。質問者は、ナーガールジュナの『宝行王正論』に立脚してこの理解を提示する。ガワンタシの与える問答が示すのは、いくら着手（sbyor ba, prayoga）すなわち実際的な業が黒であっても[20]、それを引き起こす原因が白であれば、その業は善業として理

---

[17]実際に弟子を叩いたりしているその瞬間だけに注目すれば、その人は汚されているのかもしれないが、全体として考えた場合、その人（師匠）は善業をなしていることになる、ということであると考えられる。

[18]ASBh 70.4ff.: **prayogataḥ kr̥ṣṇam āśayataḥ śuklaṃ** yathāpi kaścit putraṃ vā śiṣyaṃ vā ’hitān nivārayitukāmo hite ca niyojyayitukāmo ’nukampācittaḥ kāyena vācā vā paruṣayaṃs tasmin kāle saṃkliśyate ||

Bayer 2010: 239: “Black from [the point of view of its] preparation and white from [the point of view of its] disposition is like [when] someone, wishing to keep his son or disciple away from harm and wishing to direct them to [their] welfare, with a caring thought, treats him roughly with body or speech and is at that time defiled [thereby].”

[19]RĀ I 20cd: alobhāmohādveṣaś ca tajjaṃ karma ca tac chubham ||

[20]prayoga「着手」をめぐって、『倶舎論』、『集論』註釈とガワンタシの間で、理解の相違が見られる。『倶舎論』や『集論』註釈の定義によれば、prayoga「着手」とは、実際の業（根本, maula）にいたるまでの準備段階的な業であるが、ガワンタシは実際の業として理解しているようである。『倶舎論』と『集論』註釈で、prayoga「着手」は次のように定義されている。AKBh 239.11ff: atha kuto yāvad eṣāṃ prayogamaulapr̥ṣ̥ṭhānāṃ vyavasthānam | yadā tāvad iha kaścit paśuṃ hantukāmo mañcakād uttiṣṭhati mūlyaṃ gr̥hṇāti, gacchaty āmr̥śati paśuṃ krīṇāty ānayati puṣṇāti praveśayati hihantuṃ śastram ādatte prahāram ekaṃ dadāti dvau vā yāvan na jīvitād vyaparopayati, tāvat prayogaḥ |（「さて、この着手の設定、根本の設定、後起の設定はどこからどこまでか。

解されるということである。この理解は、黒白業を善業か不善業のどちらか決定する際、意思と着手の二つのうち、意思の方がより重要な要素としてみなされていることに起因すると言える。

4 結論

黒白業の理解をめぐっては、『倶舎論』と『集論』の間に相違点がある。『倶舎論』では、黒白業を衆生の心相続の観点から区分するのに対し、『集論』では、ある一つの業を意思と着手の二つの観点から分析し、それぞれの観点に違いがある場合に、その業が黒白業として理解されるのである。また、『倶舎論』と『集論』では、黒白業を善業、不善業のいずれで理解するかにも相違点がある。『倶舎論』では、欲界を結果する善業として理解されるのに対し、『集論』の体系では必ずしも善業であるとは限らない。

ガワンタシは、この点に注目し問答を展開している。彼によれば、黒白業を善業か不善業のいずれで理解するのかという場合に最も重要な要素になるのが、「意思」（bsam pa, āśaya）という概念である。彼は、この意思を原因と言い換えて、この原因に付随する形で実際の業が発生すると理解する。すなわち、黒白業が善業であるのか、あるいは不善業であるのかを決定する第一の要素は、原因が善性か悪性かということである。ガワンタシは、基本的には『集論』の理論に立脚した理解を示すが、適宜『倶舎論』の理論も取り入れることで、より整合性のある理解を導き出していると考えられる。

彼は、『集論』の黒白業の理論を応用する形で、殺生業を主題とした問答を展開している。彼によれば、意思（bsam pa, āśaya）が白の場合の殺生については、実際的な業（殺生）を見れば、黒だが、そもそもの原因（意思）が白であり、なおかつその殺生は結果的に白い異熟をもたらすため、善業として理解される[21]。ガワンタシにとって、本論文で検討した『集論』の黒白業の議論は、業の善、不善を理解する際に極めて重要なものであったと考えられる。

略号と文献

(1) インド撰述文献

AK *Abhidharmakośa* (Vasubandhu). See AKBh.

AKBh *Abhidharmakośabhāṣya* (Vasubandhu): P. Pradhan ed. *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*. Tibetan Sanskrit Works Series Vol. VIII. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute. 1975.

AN *Aṅguttaranikāya*: R. Morris, E. Hardy, and M. Hunt eds. *The Aṅguttara-Nikāya. Part II. Gattuka Nipāta*. London: Pāli Text Society.

AS *Abhidharmasamuccaya* (Asaṅga): see Bayer 2010.

ASBh *Abhidharmasamuccayabhāṣya* (Jinaputra): N. Tatia ed. *Abhidharmasamuccaya-Bhāṣyam*. Tibetan Sanskrit Works Series 17. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute. 1976.

ここで、ある者が、家畜を殺害しようと思って座から立ち上がり、金銭を掴み、〔店に〕行き、〔家畜に〕触れ、家畜を購入し、〔家畜を〕連れて帰り、〔家畜を〕育成し、〔屠殺場に〕入らせ、殺害するためにナイフを取り、一度、もしくは二度の切断をして、命を奪うまでの間が着手である。」）

ASBh 63.16ff.: **prayoga**s tatkriyāyai svayam parair vā kāyavāṅmanobhir ārambhaḥ |（「**prayoga** とは、それの実行のために自ら、あるいは他人をつかって身体、言葉、意を用いて着手することである。」）

ただし、ガワンタシのように、prayoga を実際の業として理解しても問題はない。というのも、師が弟子を叩くという行為に着目すると、暴力行為をはたらいていることに変わりはないため、実際の業すなわち根本（maula）と同然であるからである。ガワンタシの理解に従えば、『倶舎論』や『集論』註釈で言及されるところの prayoga は、その直前の āśaya すなわち動機（kun slong）がそれに該当すると考えられる。

[21]殺生業をめぐるガワンタシの見解については、別稿にて論じる予定である。

RĀ *Ratnāvalī* (Nāgārjuna): M. Hahn ed. *Nāgārjuna's Ratnāvalī. Vol. 1. The Basic Texts*. Bonn: Indica et Tibetica. 1982.

(2) チベット撰述文献

rTen 'brel chen mo *Zab mo rten cing 'brel bar 'byung ba'i mtha' dpyod legs par bshad pa'i rgya mtsho* (bSe ngag dbang bkra shis): Ulan Bator ed.

(3) 漢文文献

中阿含 中阿含経（崔曇僧伽提婆譯）: T. No. 26. Vol. 1.

婆沙論 阿毘達磨大毘婆沙論（玄奘譯）: T. No. 1545. Vol. 27.

(4) 欧文・和文資料

Bayer 2010 Bayer, Achim *The Theory of Karman in the Abhidharmasamuccaya*. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.

Deleanu 2019 Deleanu, Florin "Dating with Procrustes: Early Pramāṇavāda Chronology Revisited." (Bulletin of the International Institute for Buddhist Studies 2). *International Institute for Buddhist Studies of the International College for Postgraduate Buddhist Studies*. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.

Woodward 1982 Woodward, Frank Lee *The Book of the Gradual Saying (Anguttara-Nikāya) or More Numbered Suttas*. London: Pāli Text Society.

舟橋 1987 舟橋一哉『倶舎論の原典解明　業品』法蔵館

本庄 2014 本庄良文『倶舎論註ウパーイカーの研究　訳註編下』大蔵出版

三友 2007 三友健容『アビダルマディーパの研究』平楽寺書店

（やのした　ともや、広島大学大学院博士課程後期・日本学術振興会特別研究員 DC1［インド哲学］）

Ngag dbang bkra shis's View of Black-White Karma

YANOSHITA Tomoya

Through an analysis of the debate in his *rTen 'brel chen mo*, this study clarifies the later dGe lugs pa scholar bSe Ngag dbang bkra shis's (1678–1738) understanding of black-white karma.

According to the Buddhist theory of karmic fruition, if sentient beings accumulate virtuous or unvirtuous karma, they transmigrate into either happy or unhappy realms. This theory is related to the idea that karma is classified into four types: black, white, black-white karma, or neither black nor white karma. This idea can be found in the early Buddhist canon. The definition of the four types of karma is given in Vasubandhu's *Abhidharmakośa* and its *Bhāṣya*, and in Asaṅga's *Abhidharmasamuccaya*. It is noteworthy that Vasubandhu's definition of black-white karma is quite different from Asaṅga's. The former defines it as a continuum of virtuous karma mixed with unvirtuous karma, whereas the latter defines it either as the karma in which one performs white preparation (*prayoga*) motivated by black intention (*āśaya*) or as that in which one performs black preparation motivated by white intention. Furthermore, while black-white karma is interpreted as virtuous karma in the *Abhidharmakośabhāṣya*, it is interpreted as either virtuous karma or unvirtuous karma in the *Abhidharmasamuccaya*.

According to Ngag dbang bkra shis, one who performs white preparation (*sbyor ba*, *prayoga*) motivated by black intention (*bsam pa*, *āśaya*) accumulates unvirtuous karma, whereas one who performs black preparation motivated by white intention accumulates virtuous karma. This suggests that it is intention that determines whether karma is virtuous or unvirtuous. Moreover, closer scrutiny of Ngag dbang bkra shis's debate, moreover, reveals that he takes the view that preparation for unvirtuous karma arises from the three roots (*lobha*, *dveṣa*, and *moha*), which can be found in *Abhidharmakośa* IV.68d.

We can draw a reasonable conclusion that Ngag dbang bkra shis, developing a syncretic theory that is an amalgamation of Vasubandhu's and Asaṅga's view of black-white karma, attempted to give a rational interpretation of this slippery type of karma.

The Annals of the Research Project Center for the Comparative Study of Logic 20 (2023): 167–180.
email: tomoya.yanoshita@gmail.com